

歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家

岡田 晃

第四十一回

知られざる戦国最強武将・立花宗茂（奇跡の復活劇も

生涯で一度も負けたことがない

「西国一の猛将」「比類なき武芸の達人」

「戦国最強の武将」といえば、だれを思い浮かべるだろうか。最近あるネットメディアのランキング上位には、武田信玄、上杉謙信、織田信長、真田幸村、伊達政宗らの名が並んでいた。うなずける顔ぶれである。

だが彼らに引けを取らない、いやそれ以上に強かったのが立花宗茂だ。兵力十倍の敵に勝つこと数え切れず、なにしろ生涯でおそらく数百回におよぶ合戦で一度も負けたことがないという強さ。現在の知名度はやや低い、当時の多くの武将から「西国一の猛将」「比類なき武芸の達人」と称賛されたほどだ。

宗茂がいかに強かったかを見てみよう。

一五六七年、九州豊後の大友宗麟の重臣・高橋紹運の長男として生まれた（生年は異説もあり）。紹運も武勇に優れた人物で、宗茂はそんな父の血

を受け継いだのだろう。

初陣は十五歳の頃（一五八一年か）。百五十人の兵を率いて出陣した宗茂はあえて父と離れた所に陣を張って父に頼らない姿勢を示し、大長刀を振り回す敵将の一人を弓矢で射って手傷を負わせて組み伏せ、討ち取った。

この戦いぶりに惚れたのが、同じく大友氏の重臣だった立花道雪だ。彼もまた勇猛で知られていたが、男子がいなかった。そこで「宗茂を養子にほしい」と紹運に申し入れた。紹運は渋ったが、尊敬する先輩の道雪の再三の申し入れに、最後は折れた。

道雪の養子となった宗茂は、養父・道雪、実父・紹運の二人の父とともに各地の戦いに出陣、活躍を続けた。

島津の大軍を相手に守り切る 「オンリーワン」の強み発揮

だがその頃、大友氏の勢力は衰退し始めてい

た。北からは毛利氏が九州北部に勢力を伸ばし、南からは島津氏が北上してきていた。この事態に宗麟は一五八六年、豊臣秀吉に救援を求め、秀吉は島津討伐のため九州出陣を決めた。

島津軍は秀吉軍が到着する前に九州全土を支配しようとして、五万の大軍を擁して筑前にまで侵攻してきた。大友側は防衛の最前線として、宗茂が立花城（立花山城とも。現・福岡市など）に四千の兵で籠城、ここから四里（約十六キロメートル）の岩屋城（現・福岡県太宰府市）には実父・紹運以下七六三人が籠城した。だが岩屋城では半月の戦いの末、紹運以下全員が討死または自害という壮絶な最期を遂げる。宗茂の養父・道雪もすでにその前年、戦いのさ中に病死している。

まだ二十歳の宗茂は孤軍奮闘を強いられたが、秀吉軍が到着するまでの間、島津の大軍の猛攻をしのぎ切った。城を守っただけではなかった。島津軍にたびたび奇襲をかけて数多くの損害を与えた。秀吉軍の到着間近となって退却を開始し

た島津軍を追撃し、敵方の城を落とした。さらに岩屋城の奪回まで果たしたのである。

もし宗茂がここで負けていれば、島津氏が九州全土を制圧し、秀吉の九州平定はスムーズに進まなかっただろう。秀吉は宗茂を「日本無双の勇者」と激賞、宗茂に筑後柳川八万石を与えた。大友氏の家臣から独立した大名に取り立てたのである。

豊臣政権下では、二度の朝鮮出兵で参陣、めざましい武功を挙げている。特に第二次蔚山城の戦いでは、三万の明・朝鮮軍に包囲され窮地に陥った加藤清正を救出するため、わずか千の兵で駆けつけ、救出に成功したという話も残っている。

以上のような宗茂軍の強さは、多彩な戦術や的確な状況判断、兵士たちの士気の高さと強い結束力、そして宗茂自身が家臣に心から慕われていたことによるものだった。現代の企業経営でい



ば、他に負けない「オンリーワン」の強みを持っていたのである。

しかも、すでに大友氏の勢力衰退が顕著だったにもかかわらず、あくまでも忠義を貫き、戦い抜いた。この姿勢は、のちの関ヶ原の戦いで西軍に味方したことにも表れている。「忠義」という言葉が現代に即して考えらるなら、他者との信義あるいは信頼関係という言葉に置き換えることができるだろう。それをブレずに貫いたことが、宗茂の評価をさらに高めているのである。

関ヶ原に間に合わず… 実力認められ完全復活

だが一六〇〇年、運命の関ヶ原の戦いを迎える。秀吉への恩義から西軍に参加した宗茂は九月七日（旧暦）、西軍から東軍に寝返った京極高次の大津城を包囲し、十二日に攻撃を開始した。ここでも立花軍は強さを発揮して、早くも翌日には三の丸、二の丸を相次いで陥落させた。十四日には高次に降伏開城を勧告、高次はこれに応じて十五日に城を退去した。宗茂の活躍により、西軍はわずか数日で前哨戦に勝利したのだった。

ところがその十五日、予期せぬ事態が起きていた。関ヶ原で東西両軍が激突し、西軍が敗北したのである。「こんなにも早く両軍が全面对決し、しかも一日で勝負がつくとはい——想定外だったとはいえ、宗茂の生涯でただ一度かつ最大の痛恨事だった。もし宗茂が関ヶ原に間に合っていれば、西軍が勝っていたかもしれない。

関ヶ原の戦い後、徳川家康は数多くの西軍大名

を処分し、宗茂も改易となった。柳川城を去る時、数多くの領民が泣きながら、宗茂の後をいつまでもついてきたという。

浪人となった宗茂は京都や江戸に移り住み、不遇の時期を過ごした。清正や前田利長など有力大名から「家臣ごと召し抱えたい」と誘いを受けたが、これらをすべて断ったそうだ。

そして数年後、徳川秀忠に許されて陸奥棚倉一万石の大名として復活する。さらに一六二〇年には旧領・柳川への復帰が認められた。石高は約十一万石。完全復活である。

関ヶ原の戦いで改易された西軍大名のうち、大名に復活できたのは約十人に過ぎないが、その中でも旧領に復帰できたのは宗茂（および弟の直次）だけだ。それだけ秀忠が宗茂を高く評価していたわけで、逆に謀反を起こされたら手ごわいと恐れられたとも言える。まさに、宗茂の強さが完全復活の原動力となったのだった。

宗茂のこうした軌跡は、現在の企業経営においては営業力や技術力など他に負けないオンリーワンの強さ、信義を大事にするトップのブレない姿勢、的確な状況判断と統率力、チームの高い士気と上司・部下の信頼関係などが、いかに重要かを教えてくれている。

岡田晃

(おかだ あきし)

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。ワールドビジネスサテライト（WBS）「マーケットキャスター」、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。